



執筆者

柳沢 如樹

やなぎさわ なおき
柳沢クリニック 院長

幼少期を約10年間、アメリカ・ボストンで過ごす。2003年千葉大学医学部卒業。がん・感染症センター都立駒込病院感染症科(医長、院内感染対策室長)で勤務の後、2017年ハーバード公衆衛生大学院修士課程修了。同大学院リサーチフェロー、国立国際医療研究センター国際医療協力局を経て、2019年より現職。国立国際医療研究センター客員研究員、東邦大学医学部非常勤講師、杏林大学医学部非常勤講師を併任。

地域から発信できる 感染症対策をめざして

シンプルな言葉、聞きやすい雰囲気 基本を繰り返し伝え続ける

「その症状なら、3日後にはすっきりよくなっていくよ」。子どもの時、叔父が私にかけてくれた言葉である。医師であった叔父の「予言」通り、体調は3日後には回復した。子ども心に「なんで未来がわかるのだろう」という不思議な気持ちと、医師という職業に「かっこいい」という憧れを抱いたことを今でも鮮明に覚えている。あれから35年以上が経過したが、現在、私は叔父が開設したクリニックで、地域の皆様の健康を守るという、叔父が生前最も大切にしていたことを実践している。

◆ ◆ ◆
今こそ新型コロナウイルスの大流行で感染症が注目されるようになったが、私が研修医であった約20年前、感染症専門の医師はとて少なかった。それでも、感染症を専門にすることを決意したのは、診断がつかずに感染症で苦しんでいた患者さんを数多く診療したからだと思う。中でも最も印象に残っている患者さん

は、研修医1年目の時に担当した。その患者さんは発熱が数カ月も続き、いくつかの病院を受診しても診断がつかなかったため、感染症の専門病院である駒込病院を受診した。詳しくお話を伺うと、発熱の度、抗生剤を使用しては改善し、しばらく経つと悪化することを繰り返していた。一緒に担当した諸先輩方のお力もあり、入院の翌日には診断が確定し、治療開始とともに速やかに解熱が得られた経験は忘れがたい。患者さんから「この数カ月間のしんどさが嘘みたいですよ。本当にありがとうございます」と言われ、とてもうれしかったと同時に、「正確な診断に基づく治療」の重要性を実感した。

◆ ◆ ◆
また、多くの感染症と対峙している中で、「予防に勝る治療なし」ということを何度も実感した。全国で「麻しん」が大流行した2007年当時、私が担当した20代の患者さんは、39度の発熱と全身の発疹で来院し、麻しんの診断で入院した。患者さんの体調は徐々に回復してきて、ある日突然「先生、トイレに行っても、全く出ないです」と訴えてきた。その後、意識状態が悪化したため、麻しんの重篤な合併症である脳炎と診断。幸い、患者さんは後遺症もなく退院できたことから、ワクチン接種での予防の重要性を痛感した。

◆ ◆ ◆
現在はこれまでの感染症領域での知識や経験を生かし、少しでも地域の方々の力になりたいと考えている。特にコロナ禍ではさまざまな情報が氾濫しているた

め、現場で最も必要とされているのは「科学的な知識に裏付けられた正確な情報」ということだと感じている。これまで東京都や東京都看護協会、学校関係者からの依頼での講演、企業からの依頼で感染症対策のアドバイス、地域における新型コロナウイルスワクチンの接種、職域領域でのワクチン接種責任者を担うなど、自分ができる限りのことは実施してきた。また、コロナ禍以前より2つの大学の医学部で学生の感染症講義を担当しているが、若い世代に教育できる機会に恵まれていることにも感謝したい。クリニックに来院する患者さんにはいつもシンプルな言葉で、感染症対策の基本を繰り返しお話しし、間違った情報に惑わされないよう、聞きやすい雰囲気をこれまで以上に作ることを心がけている。

◆ ◆ ◆
来院する患者さんからよく聞く質問に「先生は感染症のご専門だから、感染症予防のため、何か特別なことをしているのですか」とある。私は「特にありません。いつも皆さんにお伝えしていることを、自分自身、そして自分の家族にも話して、毎日実践しているだけです」と回答している。それを聞くと、患者さんは皆、安堵の表情を浮かべる。私は帰宅すると、「ただいま〜お父さんは帰ってきたらまず何をしますの?」とまだ幼い子どもたちにあらう〜と元気に答えてくれる。今後もし引き続き、地域から発信できる感染症対策を、地に足をつけて、実践していきたい。